向島物語

小杉健治

小杉健治

向島物語

一九八九年一〇月一〇日　初版印刷
一九八九年一〇月二〇日　初版発行

著　者　小杉健治
発行者　嶋中鵬二
印刷所　図書印刷
製本所　文勇堂製本
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二-八-七
振替　東京二-三四

©1989 CHUOKORON-SHA, INC.
Printed in Japan

ISBN4-12-001874-1

目次

第一話　竹屋の渡しの別れ　5
第二話　すみだ川あと追い心中　61
第三話　花街非情　127
第四話　柳橋挽歌　189

装幀　蓬田やすひろ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

向島物語

第一話　竹屋の渡しの別れ

1

月は雲間に隠れても、隅田川桜堤の常夜灯が道しるべのように灯っている。その土手伝いを、提灯の明かりを揺らせながら、一台の人力俥が走っていた。饅頭笠をかぶり、はっぴに腹掛け、股引きという出で立ちの俥夫は梶棒を握って一定の歩幅で疲れも見せない軽ろやかな足取りであった。

明治二十年秋、夏の間は舟遊びで賑わった隅田川に屋形船の影もなく、堤には葉桜が続いている。

三囲(みめぐり)神社の参道の明かりが後方に消えると、また、暗い夜道になる。

人力俥の客は日本橋に本店のある住新銀行頭取の村岡喜平であった。鼻の下の長いヒゲは、それなりの貫禄を見せているが、細い目は冷酷な感じがする。両替屋の二代目の次男として生まれ、明治政府にとり入り、住新銀行を創業した。今の首相伊藤博文の懐に深く入り込んでいる。それだけの自負があるのだろう、村岡はふんぞり返って、これから向かう妾宅のお良(りょう)のことを考えていた。

新橋の芸妓だったお良をひかせて、向島に住まわせたのは半年前。金力に物を言わせ、強引にお良を囲ったのは、伊藤もお良に目をつけていた節があるからだ。薩長土肥出身の維新政府の大臣や参議たちによって新橋が栄え、新橋芸者を二号、三号にする者が多かった。村岡は、お良をいちはやく彼らの目の届かないところに連れ出したかったのである。

お良は芸事に通じ、長唄、踊り、鼓とこなし、特に三味線の腕は誰にもひけをとらないほどである。器量も、新橋では五本の指に入るだろう。そんな新橋の名妓を我が物にした充足感に、村岡は酔っていた。

お良のことを考えて顔をにやつかせていると、俥が急に速度を落としたので、がくんと村岡は前のめりになった。あわてて足を踏ん張ると、俥夫の大声が聞こえた。

「あぶねえじゃねえか！」

道の真中に手拭でほおかぶりした長身の男が立ちふさがっていた。二十五、六歳と思えるその男は羽織をゆっくり脱ぎながら、村岡に向かって、

「住新銀行の頭取村岡喜平さんでいらっしゃいますね？」

と、声をかけた。

「誰だ、おまえは」

村岡は男の無礼をとがめるように強い調子できいた。

「保田真之丈ですよ」

「なんだと、保田……？」

村岡は目をむいて相手を見た。保田真之丈は以前にも、村岡を襲ってきたことがあった。そのとき、村岡の配下の者が、真之丈を逆に痛めつけ深手を負わせたはずであった。それから、二カ

月以上も姿を見せず、胸を病んでいる様子から、どこかでのたれ死んだのかと思って安心していたのだ。

「なんとか病も癒えましてねえ。こうやって参上したってわけです。そんときの礼もたっぷりとさせていただきます」

男は雪駄をゆっくり脱いだ。

「おまえを殺さなければ、大川に身を投げて死んだ妹がうかばれないんでね」

「待て！　おまえは誤解しておる」

村岡が悲鳴のような声を出した。

「俥屋さん、妹の小夜は、こいつの屋敷に奉公に行っていたんですよ。まだ、十七歳でした。ところが、この男に辱めを受け、この五月に、大川に飛び込みました。どうぞ、兄が妹の敵討ちをするところを見届けてやってください」

男は、目は村岡を見すえたまま、俥夫に説明した。俥夫は言葉を失い、中腰のおかしな恰好で男を見ていた。

「待て！　小夜は自分で死んだのだ」

村岡が叫ぶ。

「死ななきゃならんように追い込んだのは誰だ！」

そう言うやいなや、真之丈と名乗った男は懐から匕首を抜いた。俥夫は悲鳴をあげながら、逃げ出した。男は俥夫に目もくれず村岡に詰め寄った。

「ばかな真似はやめろ！」

村岡は一喝した。しかし、真之丈は匕首をふりかざして迫った。村岡は俥から転げ落ちた。

「村岡、覚悟しろ」
真之丈が切りつけると、うっと村岡はうめき声をあげ、道路をはいずって逃げる。真之丈が追いついたとき、待て、という声がかなたから聞こえた。
腰にサーベルをさげた巡査がふたり、俥夫に案内されて、かけてくる。真之丈は落ち着いた声で、
「村岡、きょうのところは見逃してやる。こんど逢うまで、首を洗って待っていろ」
と、言い残して三囲神社のほうに逃げて行った。
「だんな、だいじょうぶでございますか？」
俥夫が村岡のところにかけ寄って声をかけた。村岡は腕を押さえて目をむいていた。
真之丈のあとを追った巡査のひとりが途中で引き返してきた。
「いったいどうしたというんだ？」
ヒゲの巡査が提灯を出して村岡の顔を照らした。その瞬間、巡査は直立不動の姿勢をとった。
「これは、住新銀行の……」
巡査は村岡を知っていたのだ。今度は言葉を改めてきいた。
「いったい、何が？」
「物盗りだ」
村岡の言葉を、巡査は不満そうに聞いた。
「しかし、保田真之丈とか名乗っていたそうですが？」
どうやら、俥夫がしゃべったようだ。だが、村岡は、
「ちがう。忘れたまえ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と、強い口調で言った。巡査は俥夫と顔を見合わせた。
「おい、行くぞ」
村岡は何ごともなかったように、俥に乗り込んだ。
「ちょっと、お待ちになって」
巡査は引き止めた。その巡査に、村岡は鋭い目を向けた。巡査は一瞬臆したように、
「まだ、あの無頼漢がいるかもしれません。お送りいたします」
と、言った。村岡は答えなかった。
寮はわらぶき屋根、玄関は格子造りで小粋な感じの建物であった。
村岡は門の前で、俥を下りると、巡査と俥夫を帰した。門を入り、玄関に着くと、お良が出てきた。軒灯のランプの明かりが、村岡のあおざめた顔を照らしている。
村岡の羽織の袖が大きく切れて、腕から血が出ているのを見て、お良はびっくりしたような声を出した。
「まあ、どうなさったんです？」
村岡はさっさと中に入った。
「水をくれ」
と言って、村岡は奥の座敷に向かった。お良はすぐに台所に行って、茶碗に水を汲んできた。
村岡はそれをぐっとひと息で呑み乾した。
「かすり傷だ」
お良は薬箱から傷薬を取り出して、傷の手当をした。
「いったいどうなさったのですか？」

お良はもう一度きいた。
「物盗りにあった」
「まあ、恐い」
お良は顔をしかめた。
村岡はひりひりする傷口の痛みに、しぶとい野郎だと、保田真之丈のことを思って、顔をしかめた。ずっと、つけ狙っていたのかもしれない。この寮もつきとめられているにちがいない。
「お良、しばらく、この寮に用心棒が必要になったな」
「用心棒？」
お良は薄気味悪そうに身を縮めた。

2

村岡はどうしたわけか、しばらく、姿を見せなかった。
軒灯の石油ランプに灯を入れる点灯夫が脚立を肩にかけ、手提げランプを持って歩いている時刻、村岡の使いがお良のもとにやって来た。昇吉という五十半ばの小柄な男だった。昇吉は、新橋で芸者の三味線を入れた箱を持ち運ぶ箱屋をしている男だったが、お良が村岡にひかされたあと、すぐ、村岡のひきで向島の見番（けんばん）に移ってきたのである。このころ、向島は花柳街を形成していたわけではない。したがって、見番といっても、ただ、芸者の取り次ぎをするだけのものだった。芸者にしても、十数名しかいないのだ。
「橋本へおいで願いたいとのことです。外に俥を待たせてあります」

昇吉はそう言った。橋本というのは、柳島の妙見社の境内にある料亭で、江戸時代から、亀戸天神の藤見物や、墨東の郊外に遊びに来た帰りに、船を利用して橋本にやって来るのが、墨東遊びの楽しみになっていた。

江戸時代末期、豪華な割烹になっていった市中の料理屋に飽きたひとびとが、郊外のひなびた田園の中に、素朴な味を求めていったのである。

「すぐ、支度しますから、外でお待ちになって」

黒縮緬の羽織を羽織って、外に出ると、人力俥が待っていた。乗る前に、昇吉に、村岡が連れてきた客を訊ねた。すると、昇吉は小声で、

「伊藤さまです」

と、ささやいた。

人力俥に揺られながら、お良はなんとなく気が重かった。伊藤博文には悪い印象しかないからだ。

橋本に着くと、目つきの鋭いやせた男が玄関の前にいた。村岡が用心棒として雇っている又蔵という男であった。橋本にやって来る客ひとりひとりに、鋭い視線を送っている。お良が俥からおりると、又蔵は一瞥をくれただけだった。

橋本の二階に案内されると、ヒゲをはやした伊藤博文とその側近らしき男三名、それに、村岡が、見慣れぬ芸妓三人をはべらして呑んでいた。向島にはもともと芸者は少なく、だから、吉原や柳橋などの芸妓を連れてくる客は多かった。柳橋あたりと思われる芸妓は、お良を見ると、きっと目をきつくした。自分たちより美しい女に対する嫉妬心であった。村岡にひかされて芸者をやめたとはいえ、お良は新橋の売れっ子だったのである。お良の前では、柳橋の芸妓も色あせて

見える。

「お良、ここに来て、伊藤さまにお酌しなさい」

村岡はいらだったように言った。その様子でも、村岡は心からお良をここに引っ張ってきたのではないことがわかる。お良はまっすぐに伊藤の前にすすんだ。四十七歳の伊藤はまじまじと好色そうな目をお良に向けた。村岡がぶすっとした顔をしていた。

〽橋本へ着ける岸のうかれ舟　すだれかかげて二階から　のぞく田面にむらすずめ

地元の芸者が小唄を唄った。唄の文句のように、二階の窓の外は葛西たんぼが広がっている。

伊藤は、日本が幕末から明治初期にかけて西欧諸国と結んだ不平等条約の改正問題などで心労ぎみだと、村岡から聞いたことがあるが、きょうの伊藤はご機嫌だった。お良の手をつかんで離さない。村岡はやきもきしたように、しきりに酒を呑んでいた。

伊藤はその日、早めに引き上げた。伊藤について、村岡も帰って行った。帰りがけ、伊藤がお良の耳元でささやいた。

「一度、屋敷に来い」

すたすたと畳を踏んで去って行く伊藤の後ろ姿を見ながら、鹿鳴館で仮装舞踏会を開いて浮かれているさまを想像して、お良はいい感情を持てなかった。

寮に帰っても、伊藤博文の吐く息が、まだ顔や手についているみたいで、気色悪かった。いくら、明治国家を造り上げた男かしらないが、お良の目から見ればただの男に過ぎない。お良は三味線を出した。心が晴れないとき、糸を爪弾くと、不思議に心がやすらぐのだった。

新橋が恋しかった。向島のような田舎から早く出たい、とお良はいつも思った。

お良は旧佐倉藩士の長女で、千葉に生まれた。この時代のお定まりのように、お良もまた零落した実家の窮乏を助けるために、十三歳のときに、柳橋にお酌として出た。そこの置屋の女将（おかみ）は芸事に厳しかった。そのおかげで、お良は小唄や三味線は上達した。十九歳のとき、新興の新橋に移った。新橋では売れっ子のひとりになった。

それから、しばらくして、村岡に見初められたのである。父親の長患いから借金がかさみ、その借金を返すために、村岡にひかされることを決心したのであった。

世話をしてくれている料亭の女将の頼みを断れないこともあったが、実家への援助という村岡の申し出に、お良は自分の心を捨てたのだ。

ふと、お良は三味線の爪弾きを止めて、耳を澄ました。いつの間にか、鈴虫の鳴き声も消えている。三味線を置くと、お良はそっと立ち上がって、庭に面した障子を開けた。

秋の月が、すすきが風に揺れている庭に淡い光を投げかけている。隅田の川風がお良の顔をそっとなでるように吹いた。

石灯籠の陰に誰かが隠れたような気がした。お良は濡れ縁に出た。

「誰だい、そこにいるのは？」

お良は覗き込むようにして、石灯籠に向かって声をかけた。微かな三味線の音は、柳島の橋本、水神の植半などとならぶ名の通った料亭まさきの座敷からだ。

かさかさという音がして、石灯籠の笠の向うから、男の顔が現れたのは、月がむら雲に隠れたときだった。

「誰なんだい、おまえさんは？」

気丈なお良は強い口調で言った。
「お騒がせして申し訳ありません」
男が素直な声を出した。陰になっていて、表情はよくわからないが、声からも若い男のようだった。
「あまり、いい音色だったもので、つい……」
若い男はその場に立ったまま言った。言葉遣いはていねいだが、少し、相手の胸を刺すような鋭さが感じられ、お良は警戒した。お良の表情を察したのか、男はあわてて、
「怪しい者じゃありません。月に誘われて土手を歩いてまいりましたら、三味の音が聞こえるじゃありませんか。つい、ふらふらっと裏木戸を開けて庭に入り込んでしまいました。許してやってください」
「通りがかりの方を呼びとめるほどの音じゃないけどねえ」
お世辞とわかっていても、腕をほめられて悪い気はしない。お良は相手の言葉に気を許したが、ふと、男の懐のあたりに何かが見えた。お良の顔色に気づいたのか、男はさっと手を懐にしまった。
「おまえさん、懐に隠したものは何だい。匕首だろう？」
お良は声を高めてとがめるように言った。男はあわてて、
「姐さん、すまない。姐さんに危害をくわえようってわけじゃねえんです」
と、小さな声を出した。やがて雲が流れ、再び、月が顔を出した。仄かに浮かんだ男の顔だちは、そう悪くはなかった。頬がそげおちたところに、やや崩れたところも見受けられるが、悪い男のようには思えなかった。少なくとも、自分に危害をくわえようとしているのではないことは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com